様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１７６

研究課題名（和文）亡命ロシア文学におけるアメリカ文化受容の諸相

研究課題名（英文）The American cultural impacts on Russian emigrant authors

研究代表者
竹内　恵子（TAKEUCHI, Keiko）

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：１０６００２２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ロシア連邦とアメリカ合衆国で資料収集および人脈構築を行うことによって、20世紀の亡命ロシア文学者、特にノーベル賞詩人ヨシフ・ブロツキイの生涯と作品におけるアメリカ文化受容の経緯とその影響について考察した。そのうえで、ソ連時代のブロツキイとアメリカ国民詩人ロバート・フロストとの関連性を扱った論文や、ブロツキイ自身による自作詩の英語訳に関する論文を発表したほか、本邦初となるブロツキイ研究書を出版し、日本における亡命文学研究に一石を投じることができた。

研究成果の概要（英文）： I researched the American cultural impacts on Russian emigrant authors, especially on the Soviet-American poet Joseph Brodsky, the Nobel prize winner.
At first, in Russia and the United States, I found his many manuscripts, preserved in the museum and the libraries. And then, I've made personal relationships between the people, who know Brodsky's works and himself.Besides, I wrote one paper about Robert Frost' s poetical influence on Brodsky, and another paper about Brodsky's self-translations (from Russian into English). Finally, I published the first academic book about the poetics of this outstanding bilingual poet.

研究分野：人文学

キーワード：ロシア文学　亡命文学

１．研究開始当初の背景
(1)報告者が申請した時点では、20 世紀後半に旧ソビエト連邦からアメリカ合衆国へ亡命（移住）した文学者の作品世界におけるアメリカ文化受容の経緯と分析が、特に本邦においていまだ手薄な分野であるように感じられた。したがって、本研究では、旧ソ連出身で後にアメリカ国籍を取得し、1987 年にノーベル文学賞を受賞したユダヤ系の亡命ロシア詩人であるヨシフ・ブロツキイのアメリカ移住とアメリカ文化受容に焦点を当てて研究を行おうと考えた。

(2)申請した時点では、亡命に関連したブロツキイ研究には、およそ正反対といってもよい２つの傾向があった。一方は、ブロツキイの「亡命先」である西側欧米諸国の研究者によって、ブロツキイの亡命を言語表現の可能性を広げたとするポジティヴな捉え方である。他方は逆に、ブロツキイの「出身国」である本国ロシアの研究者によって、ブロツキイの亡命を母語であるロシア語環境から疎外されたとするややネガティヴな観点から論じられているものである。報告者は、この二項対立のいずれにも与することなく、ブロツキイにとっての亡命とは、より錯綜した問題であるとの立場から研究を進めることにした。

２．研究の目的
本研究は、ブロツキイを軸として、亡命ロシア文学におけるアメリカ文化受容の諸相を様々な角度から調査し論じることによって、亡命文学の本質そのものの一端を明らかにしようとするものである。すなわち、亡命作家は越境という物理的に具体的な行為を経て初めて、異文化を受容するようになるというより、亡命以前から異文化を受容しやすいその文学者固有の内在的な志向があるのではないかという観点である。本研究が、ブロツキイとアメリカ合衆国の文化との関わりに着目したのはそのためである。詩人が長年にわたって居住し、1977 年に国籍を取得したアメリカ（1996 年に同地で客死した）の文化をいかに受容したのか考察することで、ブロツキイ研究のみならず、亡命文学研究自体への貢献をするものと想定した。

３．研究の方法
(1)同じく旧ソ連出身で、共にノーベル文学賞受賞者でありながら、ブロツキイとはおよそ好対照な亡命生活を送った作家アレクサンドル・ソルジェニーツィンとブロツキイとを比較する。ブロツキイは将来亡命することを予想だにしなかったソ連での青年時代からアメリカ文化に傾倒していたのに対し、ソルジェニーツィンは実際にアメリカに移住した経験を経ても、アメリカ文化には全く好意を寄せようとはしなかった。国内外の資料をもとにこの２人を比較検討することで、異文化を受容するにあたっての根本的な気質の相違が明らかになると考えた。

(2)ブロツキイが関心を抱いていたアメリカ詩人の中でも、若年期から特に敬愛していたアメリカの国民的詩人ロバート・フロストがブロツキイの詩学に与えた影響を精査する。ブロツキイは青年時代からフロストの詩を露訳していただけでなく、晩年には重要なフロスト論を発表した。したがって、ブロツキイとアメリカ文化との相互関係を考察する場合、フロストの詩学を併せて検証するのは必要不可欠と考えた。

４．研究成果
(1)資料収集の都合上、「ブロツキイの詩学におけるアメリカ詩（特にロバート・フロストの詩）の影響」の研究をまず優先して遂行した。その成果の一つとして、平成 24 年 10 月に「ヨシフ・ブロツキイとロバート・フロスト」と題する学会発表を行い、その口頭発表に追加訂正を行ったうえで、平成 25 年に「詩景としてのアメリカ受容――ヨシフ・ブロツキイとロバート・フロスト」という論文を発表することができた。これは、第二次大戦後の戦後世代にあたるソ連の青年詩人ブロツキイの、1960 年代という東西冷戦時代の最中の創作活動に対して、政治的には激しく対立していたはずのアメリカ国民詩人フロストの作品が、いかに根源的な影響を与えたかという事実を具体的に検証したものである。フロストは 1962 年にソ連を公式訪問し、ブロツキイの精神的師匠にあたるソ連の女流詩人アンナ・アフマートワと会見を行っているが、ブロツキイはアフマートワにフロスト詩のレクチャーをしたほどフロストに傾倒していた。にも関わらず、自身を「基本的にヨーロッパ大陸の人間」とみなしていたブロツキイは、「あまりにもアメリカ的な」フロストから次第に離れていく。ブロツキイは最期までヨーロッパ文化の伝統を継承する詩人としての自覚を持っていながら、1991 年にはアメリカ合衆国桂冠詩人に就任するのだが、この点から見ても、ブロツキイのアメリカ受容は常にねじれた構造になっているといえよう。なお、本論文を執筆するにあたり、平成 25 年に訪問した、ロシア連邦サンクトペテルブルグの「アフマートワ博物館」の担当者より（後述する）、資料および情報の提供を受けた。

(2)平成 24 年度に、「東京大学学術成果刊行助成制度」の補助金を受けて、著作『廃墟のテクスト――亡命詩人ヨシフ・ブロツキイと現代』を出版することができた。
①本書は、我が国で初めて上梓されたブロツキイ研究書であるだけではない。第 3 章「眩惑するアメリカ――ブロツキイの移住から同化まで」では、主としてブロツキイの伝記的側面に依拠しつつ、ソ連出身のロシア語詩人がアメリカに移住するにあたっていかな

る問題点を生み出すかを考察した。ブロツキイは外国出身者として初めて米国桂冠詩人のポストに就任するが、任期中にアメリカ社会での詩の振興を試みて挫折した。アメリカに長年居住しながらも「文学の力」を信奉していたブロツキイは、文学理念に関しては、旧態依然として「ロシア的」だったということがわかる。すなわち、ブロツキイにとっての亡命とは、社会的にはポジティヴな結果をもたらしていたのに対して、文学活動と言うレベルでは逆にネガティヴな環境に置かれるという、ねじれた構造を体現することだったといえよう。
②本書の第 5 章は、平成 23 年度に発表した論文「ヨシフ・ブロツキイの自己翻訳について――長編詩『ローマ・エレジー』をめぐる一考察」に加筆訂正したものである。中でも、「『新アメリカ人』の視点」と題した項目立てにおいて、アメリカ市民と化したブロツキイの作品世界の中で、ブロツキイがいかに「アメリカ人向け」の視点から自己のロシア語作品を英訳するにあたり改変したかという点を論じ、亡命ロシア詩人とアメリカ性受容の問題について政治的な観点を打ち出すことができた。

(3)①ブロツキイの資料収集調査という点に関しては、今回の研究において長足の進歩を遂げることができた。第一に、ロシア国内に現存する、亡命前のブロツキイの関連資料の調査を行った。
②まず、モスクワのロシア国立図書館（ＲＧＢ、本館）において、ロシア国内で受理されたブロツキイ研究に関する学位論文の調査および入手、また日本国内では閲覧できない図書資料などの調査を行った。
③サンクトペテルブルグのロシア国立図書館（ＲＮＢ、本館）の手稿局において、ブロツキイのソ連時代の原稿（手稿およびタイプ原稿）の調査を行った。なお、サンクトペテルブルグは旧レニングラードで、ブロツキイの出身地である。アーカイヴ番号１３３３に収められたブロツキイの資料は、1980 年代の彼の両親の相次ぐ逝去後に友人たちがひそかに保管していたものであるが、ソ連崩壊後の 1991 年に図書館に持ち込まれたものであるとされる（ブロツキイは亡命詩人だったため、ソ連ではペレストロイカ時代まで公式には存在を消されていた）。1994 年に最初の資料目録が作成されているが、後に「ブロツキイ財団」（後述する）の責任者の一人であるグリンバウム氏によって、2005 年に最新の目録が編集された（なお、これらの目録は持ち出しもコピーも厳禁であり、手書きで複写するしかなかった）。現在保管されている資料は伝記的資料、原稿、書簡、両親に関する資料など多岐にわたるが、一部の資料の閲覧にはニューヨークに本拠を置く「ブロツキイ財団」の許可が必要である。これらの資料の中に、ロバート・フロストなどアメリカ詩人に関するブロツキイの原稿が多数含まれていることを今回確認した。とりわけ、保管ファイル番号第２７番におけるブロツキイ自身の手による蔵書カードには、数十冊にのぼる現代アメリカ詩集（ロバート・ローエル、マーク・ストランド、アレン・ギンズバーグ、シルヴィア・プラス、リチャード・ウィルバーなど多数）の題名が記載されていることを発見した。これは、ブロツキイがアメリカへ移住するかなり以前からアメリカ文学に多大な興味を抱いていたことを示す重大な証拠である。

(4)図書館（ＲＮＢ）に保管されている以外の諸資料（写真、蔵書、遺品など）は現在、サンクトペテルブルグのアンナ・アフマートワ博物館（通称「フォンタンカ館」）に多数所蔵されていることが今回判明した。理由は、若きブロツキイが生前のアフマートワと親交があったことだけでなく、この博物館がブロツキイの旧宅のあったのと同じリテイヌイ大通りに位置しているからだと思われる（前述のように、友人たちが持ち込んだとされる）。現在、同博物館内には「ブロツキイのアメリカ書斎」という独立した展示セクションがあり、報告者は日本人研究者としては初めて、同セクションの管理責任者イリーナ・ボロディナ氏、研究員のエカテリーナ・ペチェニーク氏と接触することに成功した。彼女らからより、非売品の資料集やデジタル資料などきわめて貴重な資料の提供を受けた。同博物館の３階には、ブロツキイの亡命前の蔵書や雑誌等の資料が良い状態で保管されていることをも確認し、蔵書保管担当責任者であるオリガ・セイフェッヂーノワ氏と面識を得ることができた。なお、同博物館は現在、ニューヨークのブルックリンハイツにあるブロツキイの最後の住居から蔵書や遺品の提供を受け、更なる資料拡充に努めていると見られる。

(5)①第二に、アメリカ合衆国内に保管されている、亡命後のブロツキイの関連資料の調査を行った。
②まず、コネティカット州ニューヘイヴン市所在のイェール大学バイネキー図書館（The Beinecke Rare Book and Manuscript Library）における、ブロツキイの資料（アーカイヴ番号ＧＥＮ　ＭＳＳ　６１３）の調査を行った。この図書館は、ロシアの図書館とは異なり、日本国内からオンラインで目録を入手することができ、事前に閲覧したいボックスを予約できるので非常に便利である。ただし、米国内におけるブロツキイおよび亡命ロシア文学に関する資料が膨大な量にのぼることが判明した。基本的に１０ボックスまでしか予約できないのだが（ブロツキイのアーカイヴだけで少なくとも２３０ボックス以上存在する）、１ボックス（２０～３０のファイルが収められており、ファイルの中に複数の

資料がある）を精査するのに半日程度かかることを考え合わせると、短期の滞在ではとても時間が足りない（今回の研究に関わる見るべきボックスは、少なくとも１００以上あった）。また、ファイルを綿密に調査していくうちに、ブロツキイの未発表の作品や未知の交友関係が多数存在することもわかり、これにも閉口した。ただし、不可解だったのは、ロシア国立図書館（ＲＮＢ）ではブロツキイの書簡を閲覧することは禁じられていたにも関わらず、このバイネキー図書館では基本的に閲覧自由だったことである（確かに閲覧できない資料、例えばブロツキイの指導学生のレポート添削など、閲覧不可の資料も相当数あったが）。その一つが、書簡を収めた第１４ボックスであり、その第３７２ファイルには 1977 年のブロツキイとソルジェニーツィンの往復書簡（共にタイプ原稿）が保管されていることを発見した。内容としては、当時ブロツキイが所属していたミシガン大学にソルジェニーツィンを招聘したものの、ソルジェニーツィンが丁重に拒絶したというものである。２人の亡命ロシア文学者の「すれ違い」を明示する資料として貴重である。今回こういった資料をある程度閲覧できたのは、非常に有意義だった。
③次に、ニューヨーク州ニューヨーク市における「ヨシフ・ブロツキイ財団（The Estate of Joseph Brodsky）」の関係者と面会した。当初は同財団ロシア語圏担当のアレクセイ・グリンバウム氏との面会を希望していたが、氏がパリ在住であることがわかり、「アフマートワ博物館」の紹介により、英語圏担当のアン・シェルバーグ氏と、同財団のあるグリニッジ・ヴィレッジで面会した。氏は元編集者で、1986 年よりブロツキイの秘書を務めた人物で、1996 年のブロツキイの急逝後は同財団の遺言執行人および管財人の立場にあり、アメリカ（特にニューヨーク）の出版界における亡命ロシア文学関連の事情に精通している人物である。今回、本邦の研究者として初めて氏にインタビューを行い、貴重な情報を得ることができ、また日本では入手不可能な資料の提供を受けた。その後、氏の紹介により、ブロツキイの最後の住居（ブルックリンハイツ）を訪問したが、未亡人マリア・ソッツァーニ氏は米国を去ってイタリアへ帰国する予定とのことで、今回は残念ながら面会できなかった。とはいえ、アメリカ市民になってからの生前のブロツキイをよく知るシェルバーグ氏と知己を得たのは幸運だった。

(6) 西側欧米諸国でこそブロツキイ研究は 1960 年代半ばから開始されているものの、本国ロシアでブロツキイ研究が解禁されたのは主にソ連崩壊後のことであり、四半世紀にも満たない。まして、日本におけるブロツキイ研究はほとんど前人未到の領域である。そのため、研究開始当初は、そもそもどこにどのような資料がどのような状態で保管されているのか、誰が管理しているのかといった基本的な情報すらなく、手探りの状態から始めなくてはならなかった。それにも関わらず、ロシアおよびアメリカ両国に現存する多数の資料の所在・状態・アクセス方法を確認し、また、日本の研究者としては誰も接触したことのない様々な亡命ロシア文学関係者と面会し、新たな人的ネットワークを構築できたことは非常に有意義な研究成果だったと確信している。もっとも、バイネキー図書館にあれほど膨大な資料が存在するなど予想できなかったなど、研究計画の甘さを指摘されても当然かもしれない。しかし、亡命ロシア文学の一翼を担うブロツキイの研究に関しては、ブロツキイ研究書の出版および海外研究者との人脈構築という点で十分な成果をあげ、我が国における今後の亡命文学研究の発展に多少なりとも貢献できるものと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①竹内恵子、詩景としてのアメリカ受容――ヨシフ・ブロツキイとロバート・フロスト、SLAVISTIKA, 査読有、２９巻、2014、23－47.

②竹内恵子、ヨシフ・ブロツキイの自己翻訳について――長編詩「ローマ・エレジー」をめぐる一考察、SLAVISTIKA, 査読有、２７巻、2012、161－184.

〔学会発表〕（計１件）
①竹内恵子、ヨシフ・ブロツキイとロバート・フロスト、日本ロシア文学会、2012 年 10 月 6 日、同志社大学（京都府京都市）

〔図書〕（計１件）
①竹内恵子、成文社、廃墟のテクスト――亡命詩人ヨシフ・ブロツキイと現代、2013、336.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
竹内　恵子　（TAKEUCHI, Keiko）
東京大学・人文社会系研究科・研究員
研究者番号：１０６００２２３

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：